ジョン・ベッチェマン

2　レミントンの女の死

女は二階の寝室で死んでいた
　　レミントンスパーの町の上空から
たそがれ時の星明かりが
　　窓ガラス越しに差し込んでいた

女のそばには　かぎ針の編み物が　　5
　　ひっそりと　投げ出されていた
口から出る言葉が消えたと同様に
　　仕上げるはずだった指の動きが消えていた

家政婦がティーセットを胸元まで高く掲げて
　　テーブルと椅子の間を縫うように入ってくる　　10
しかし　家政婦は自分の小さな魂に気を取られ
　　家具類も　住人には無関心

家政婦は大きな丸窓を閉め
　　ブラインドを降ろす
マッチで暖炉の火種をつけて　　15
　　石炭を焼(く)べる

家政婦は小声で　「お茶です
　　起きてください　もうすぐ５時になります」
ああ　安っぽい　取り繕(つくろ)った声の明るさ
　　半ば死んでるような　半ば生きてるような　　20

壁の漆喰(しっくい)が段々とはげ落ちていることにも
　　人間の心臓がいつかは止まることにも
あの黄ばんだイタリア式のアーチ門の
　　石膏がはげ落ちている音にも　お前さんは気付かない

家政婦は静かなベッドを見つめる　　25

　　灰色の朽ちゆく顔を見つめる
レミントンのたそがれ時の沈黙が
　　部屋に流れ込む

家政婦は酒瓶の載ったテーブルを
　　ベッドの脇から壁際に移し　　30
そっと忍び足で階段を降り
　　居間のガス灯の灯(あか)りを落した

（山中光義訳）